

詩とことば

阿部 公彦

薄皮一枚はさまったような、曇りのガラスを透かし見たような感触——しばしば余韻や曖昧さなどと説明されるそんな空気が詩にはつきものだ。英文学研究の大家ジョナサン・カラーによれば、これは詩と読者との間の奇妙にねじれた関係のためだという（『抒情詩論』ヘンリーヴァード大出版局、未邦訳）。

「さあ、どうぞ」とメッセージが差し出されるのではなく、日常的なコミュニケーションとひと味違う形で読者に言葉が届く。たしかに詩はときどき切んとん、ときどきは豪華絢爛に語られる。過剰なほどに「場」の気配をまとっている。しかし、読者はそこに部外者として足を踏み入れる。すでに発生した「出来事」を遅れてわきから覗くような、薄皮一枚向こうの間接性が生まれるのはそのためだ。これが詩を難しくもするし、魅力的にもする。どのようにこの「出来事」とかかわるべきなのか、私たちは戸惑う。その戸惑いから、ただの読書とは異なる読みの体験が生まれるのだ。山田亮太「オ

薄皮一枚向こうの間接性

バマ・グーグル』（思潮社）は、徹底的にこの出来事性にこだわった詩集。読者は語り手がそっぽを向いていると感じるかもしれない。たとえば公園内の言葉のカラーージュからなる「みんなの宮下公園」では「落書き禁止」とか「水を大切にしましょう」といった言葉が文脈から切り離されて雑然と散乱する。しかし、そこには奇妙な「殺到」の感覚が生まれ、詩の根源的な威力を見せつける。

対照的に野崎有以の『長崎まで』（思潮社）は語り手が他者とのかかわりを切々と語る告白風。読者も、つい親身になって耳を傾ける。全体に演歌の匂い。小説かと見紛うストーリー性もある。でも、心に踏みこむとき、不意にカーテンが引かれてしまふような、何かを遮断する意志も働き、はっとする。それは禁欲なのか諦念なのか、あるいは形へのこだわりなのか。

来住野恵子『ようこそ』（思潮社）は「The maximum output」がい。冒頭「もうおしまい／何もかも／呪文のような漣がどっと押し寄せて／散乱する夜のかげらを打ちあげ／丘のむこう／まもなくはじまろうとするすばらしい朝」の、誰のものとも知れぬ横溢する抒情がまぶしい。

（東京大准教授）